

令和 2 年 7 月 13 日現在

機関番号：32415

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2016～2019

課題番号：16K00763

研究課題名(和文) 親の主体性を育む子育て支援：「対話と傾聴」を基本とするネウボラナースからの示唆

研究課題名(英文) Parenting support that enables parents to raise their children independently  
Suggestions from Neuvola nurse which is based on "dialogue and listening."

研究代表者

向井 美穂 (MUKAI, Miho)

十文字学園女子大学・人間生活学部・教授

研究者番号：40554639

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,400,000円

研究成果の概要(和文)：親が主体的に子育てをする為に必要な子育て支援職の専門性を質的側面から検討した。2016・2018年度のネウボラの現地調査、2017年度の国際シンポジウム(2名のネウボラナースを招致)の企画及び開催を行った。ネウボラナースの「対話と傾聴」の基本姿勢、実践の振り返りと語り、ネウボラと他施設との連携、専門職養成の調査等、多角的多層的な調査と分析を行った。2019年度はネウボラにて、日本で実践可能な支援モデルについて検討した。文化や社会的背景の違いを超えた子育て・子育ての普遍的価値の存在及び支援者に必要とされる姿勢に「対話」と「対等な関係性」に対する高い意識があることが示された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

ネウボラのシステムへの着目ではなく、ネウボラナースの「対話と傾聴」の実践に着目することで、支援の基本姿勢についての新たな視点が得られた。心理療法の専門家による「対話と傾聴」とは異なる実践においても、支援の基本として有効に機能していることを明らかにし、子育て支援に関わる人々に必要とされている資質についてより具体的に検討することができた。様々な場面で「対話と傾聴」の大切さは認識されているが、その必要とされている姿勢は文化・社会的背景が異なっても等しく有効なものであった。支援職の支援技術の向上に資するだけでなく、子育て支援そのもののあり方を変えていく可能性をもたらすことは、意義があるといえる。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study is to examine the specialization of child-rearing support jobs necessary for parents to raise their children independently of qualitative aspect. The project carried out field surveys of Neuvola in 2016 and 2018, and two Neuvola nurses were invited to an international symposium organized in 2017. We conducted a multi-layered survey and analysis, including (1) the basic stance of Neuvola Nurses on the "dialogue and listening", (2) reflection and narrative of their practices, (3) collaboration between Neuvola and other institutions, and (4) a survey on professional training at University of Applied Science. In 2019, Neuvola as a support model was considered that can be implemented in Japan at Neuvola in Finland. It was shown that there was the high consciousness for "dialogue" and "equal relationship" on universal value of child rearing and child care which transcend the difference of culture and social background and attitude which the supporter is required.

研究分野：発達臨床心理学、保育臨床学

キーワード：対話と傾聴 親の主体性 子育て・子育て支援 ネウボラ ネウボラナース フィンランド 対等性 支援職の専門性

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

子育ては健全な社会を維持するうえで不可欠要素である。子育てに必要なとされる支援は文化や社会によっても異なるが、子育てを通じての親子の成長を支援することの大切さはどの社会においても認識されているといえよう。とりわけ、子育てにおいて虐待や貧困といった深刻な問題が関与している場合、複数の専門職が関わり、連携をとりながら支援することが重要である。子育て・子育て支援のニーズの高まりに応じて平成 26 年には支援拠点は全国で 6,538 か所に達しているが、虐待に関する相談は増加の一途を辿り、子育てに関する問題もより深刻になっている。支援拠点の量的充足では不十分であり、要保護児童地域対策協議会やコミュニティ会議など、地域内の支援にかかわる施設や人的資源のネットワークづくり、妊娠期から出産、子育てまでの継続的支援システムの開発など、支援体制の再構築が求められている。その中で注目されているのは、妊婦や乳幼児親子が気軽に訪問できる範囲に、妊娠期から就学まで、1 か所の施設で 1 人の支援者が子育て・子育てに伴走し、継続的支援を行うことのできる、いわばワンストップの子育て支援拠点をつくることである。地域資源を熟知し連携することのできる子育ての専門職が一貫して支援することは、親が「主体的に」子育てしていくことを支え、子育てを通じての親の成長と子どもの健全発達をもたらす。このような発想から、フィンランドにおけるネウボラを拠点とした妊娠期からの継続的子育て支援施策が注目を集め、平成 26 年度から 5 都市においてそれぞれの地域資源を活用する形で日本版ネウボラの実践が始まっている。また、平成 27 年度からは東京都が東京版ネウボラの開始を掲げ、「妊娠期からの切れ目のない支援」を目指したシステムを試行している。これらの取り組みではシステムとしてのネウボラの特徴を導入しているものの、そこでの支援者がどのような専門性を持ち、支援を実践しているかについては十分に議論されないままとなっており、今後、支援者の専門性の質的検討の必要があるといえよう。子育て中の親が、妊娠期からの長期的な子育ての伴走者としての支援職に信頼を寄せ、その支援によって親として主体性をもって子育てしていくには、何にもまして、支援職の資質が問われなければならない。

我々は、「子育て・子育て支援における支援者の役割と専門性」を明らかにすることを目的として、平成 21 年度から 3 年間、フランス、イタリア、ベルギーの研究者との 4 カ国共同研究を行ってきた（基盤研究 B 課題番号 21300265）。ここでの研究結果から、子育てのリスクを持つ親子への予防的支援が重要であり、支援職のリスクに対する感受性の高い関わり方が支援の本質にあることが明らかになった。また、先駆的な子育て支援を行っている支援拠点においては、子育てのリスク支援に対する必要性を支援職が強く感じて支援を行っていることもわかった。そこで、平成 24 年度から 3 年間は、子育てのリスクに対する予防的支援の実態とそれを可能にする支援職の資質を検討することを目的とし、子育てのリスクをもつ親子への支援の意識の高い子育て支援事業の調査を行った（基盤研究 C 課題番号 24500905）。ここでは、保育園、乳児院や地域子育てグループ、民生委員、産院と保健センター、さらには地域子育て拠点と連携して妊娠初期から乳幼児期まで親子の健全発達を支えていくなど、地域内の多職種、多組織が協力し、連携しながら妊娠期からの切れ目のない支援を行うことで、子育てのリスクに対応しようと試みていることがわかった。さらに、妊娠期からの継続的支援に関しての示唆を得るため、平成 24 年度にフィンランドの 3 都市（ヘルシンキ・タンペレ・ウロヤルビ）の 4 か所のネウボラを訪問してネウボラナース（保健師）に対する聞き取り調査を行った。その結果、地区担当のネウボラナースが妊娠期からの健診と相談、出産直後の家庭訪問、乳幼児の発達や家族関係の観察と相談を行い、保育園入園後は保育者とも情報交換することで親からの信頼を得、子育て支援の中心的役割を担っていることがわかった。

日本で「ネウボラ」を冠にして切れ目のない支援システムの導入と工夫が始まっている。しかし、支援の本質はシステムの構築にあるのではなく、そのシステムの中で実際に支援を行う支援職の資質に関わっている。そこで、本研究では、実際の支援場面の観察と分析を通して、支援の質を検討し、親の主体性を育む子育て支援のあり方を探ることを試みる必要があると考えた。

## 2．研究の目的

親の主体性を育む子育て支援のあり方について検討する。今までの研究から支援者に共通して必要とされている「対話と傾聴」の姿勢を中心にとらえ、その基本姿勢がどのように実践されるのかを分析し、子育てに向かう親の主体的態度形成への有効性を検討することを目的とする。

## 3．研究の方法

子育てにおいて親の主体性を尊重しながら有効な支援を実践しているフィンランドのネウボラでの調査を行う。

(1) フィンランドのネウボラナースによる親の主体性を尊重しながら「対話と傾聴」がいかに実践されているのかについて、健診場面の陪席及び聞き取り調査により明らかにする。

(2) 親がネウボラナースの存在をどのように認識しているのかを明らかにし、そこからネウボラナースに求められているものを分析する。

(3) ネウボラと、保育園、ファミリーセンターなど、保育・教育および福祉との連携について調査し、切れ目のない支援の具体的実践方法について分析する。

## 4．研究成果

(1) ネウボラナースによる親の主体性を尊重しながら実践している健診の実際  
健診場面の陪席及びネウボラナースへの聞き取り調査結果：

### 継続的関わり

妊娠期から関わっているネウボラナースは妊婦が母親になっていくプロセスやそのパートナーが父親になっていくプロセス、さらには子ども達が兄、姉になっていくプロセスにも関わる。まさにその家族が家族として成長していくプロセスを見守り、その家族の歴史を知っている存在といえる。妊娠期から出会ったネウボラナースは、家族から、家族の歴史を共有している存在として認識されており、その信頼関係は、継続的な家族との関わりがあることで可能となると考えられた。

### ネウボラナースと親の身体的協働

健診場面ではネウボラナースと親がそれぞれの役割を担っており、互いにその役割を果たしながら健診が進められることがわかった。子どもの発育をチェック、運動発達のチェック等、両者が赤ちゃんを中心に協働しながら行われていた。ネウボラナースと一緒に、子どものケアをすることで、子どもに対する理解を深め、結果として親としての具体的な関わり方を学ぶだけでなく役割をも学ぶことにつながっていることがわかった。健診を受けるという受け身の姿勢ではなく、ネウボラナースと一緒に健診を進めることで親としての主体性を育むことにつながっていると考えられた。

### 対等な関係

ネウボラナースと親は互いを尊重しながら対等な関係であることがわかった。親は健診の時

間を自分自身と子どものための時間であると認識しており、ネウボラナースは専門家として指導するのではなく、その家族をより理解していくための時間ととらえている。ネウボラナースへの聞き取り調査の中で「親が自分自身の事を語れることを大切にしている」という言葉もあった。指導するのではなく親自身を一人の自立した大人として認識しながら親になるプロセスに寄り添うというネウボラナースの基本的姿勢があることがわかった。

#### 親の気持ちを受け止めながら進められる対話

母親が自分の思いを語れるようにネウボラナースはオープンエンドな質問をしていた。親は自分の思いを語り、語ることで自分の思いに気づいていく。ネウボラナースは親自身が気づき、どのようにしたいかあるいはどうするかを自己決定をすることを、健診という時間を共有しながら待っていることがわかった。

#### (2) 親のネウボラ及びネウボラナースの認識

親へのインタビュー調査及びネウボラの親へのアンケート調査の結果：

##### 家族の問題について最初に相談する場として認識

子育てのことについて、最初に相談する場(人)として認識されている。地域にあるネウボラは「当たり前」に利用する場としてとらえられていることがわかった。また、継続して利用することで、ネウボラナースとネウボラにいる他の専門家との関係がより深まっていくことがわかった。

##### 子育ての伴奏者

親は子育てを行う第一義的責任は親にあるという認識を持っており、その子育ては社会的基盤の元で行うことであると考えられている。そこで、子育てを行う上で不可欠なシステムとしてネウボラはとらえられており、そこにいるネウボラナースは子育てにおける伴奏者としてとらえられていることがわかった。

#### (3) ネウボラを中心とした他機関他職種との連携

調査対象のネウボラの一つは、パイバコティとエシコウル(就学前保育・教育施設)、小学校、放課後児童施設と同じ建物内に併設されている。また、ネウボラナースと医師、就学前保育・教育施設や学校のスクールナースや保育者、教師とも連携が図られていた。子育てにおいてその地域の中心的役割をネウボラが果たしていることがわかった。

ネウボラでは幾重にも張り巡らされたセーフティネットがあり、そのことで子育てにおける安心感がもたらされているといえる。しかし、そうした制度だけで親の子育てへの主体性が構築されるわけではない。そこには、子育ての伴奏者であるネウボラナースの存在があり、子育ての最初から親の子育ての姿勢を尊重しつつ寄り添う存在があることの影響は大きい。そして、そのネウボラナースの支援者としての専門性には「傾聴と対話」という基本姿勢があり、そのことが親の主体的な子育てを可能にしている要素であることが明らかになった。支援する・されるという関係性ではなく対等な関係性がそこにはある。親の主体性を育むということは親の選択を尊重することであり、親自身が選択できることを支援することである。親に代わって何かをする支援ではなく、親が自己決定することを可能にするための支援が大切であると考えられた。さらに、そのことは日本の子育て支援の方向性を考える上で重要な示唆となると考えられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 向井美穂・上垣内伸子・井上知香	4. 巻 第48集2号
2. 論文標題 妊娠期からの継続的子育て支援の有効性 - フィンランドのネウボラにおける実践 -	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 十文字学園女子大学紀要	6. 最初と最後の頁 133 ~ 141
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計9件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 上垣内伸子・向井美穂・井上知香
2. 発表標題 フィンランド・ネウボラにおける切れ目のない子育て・子育て支援の機能 - (1) 新生児訪問にみる支援特性 -
3. 学会等名 第59回日本母性衛生学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 向井美穂・上垣内伸子・井上知香
2. 発表標題 フィンランド・ネウボラにおける切れ目のない子育て・子育て支援の機能 - (2) 親がとらえる支援の実際 -
3. 学会等名 第59回日本母性衛生学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 井上知香・向井美穂・上垣内伸子
2. 発表標題 フィンランドの就学前保育・教育施設パイバコティとエンコウルのもつ連続性と多層性 乳幼児期から学童期に続く切れ目のない支援からの考察
3. 学会等名 第28回日本乳幼児教育学会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 向井美穂・井上知香・上垣内伸子
2. 発表標題 対話と傾聴を基本とするネウボラナースからの示唆 - 専門職間の連携において「対話」の果たす役割 -
3. 学会等名 第64回日本小児保健協会学術集会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 向井美穂・井上知香・上垣内伸子
2. 発表標題 パイバコティとネウボラとの連携 - フィンランドにおける切れ目のない支援からの考察 -
3. 学会等名 日本保育学会第70回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 向井美穂・上垣内伸子・井上知香
2. 発表標題 対話と傾聴を基本とするネウボラナースからの示唆(1) ネウボラナースの健診の実際
3. 学会等名 日本小児保健学会第63回大会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 井上知香・向井美穂・上垣内伸子
2. 発表標題 対話と傾聴を基本とするネウボラナースからの示唆(2) 利用者からみたネウボラナースとの関係
3. 学会等名 日本小児保健学会第63回大会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 上垣内伸子・向井美穂・井上知香
2. 発表標題 対話と傾聴を基本とするネウボラナースからの示唆(3) 多職種で関わるリスク支援
3. 学会等名 日本小児保健学会第63回大会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 向井美穂・上垣内伸子・井上知香
2. 発表標題 パイバコティとネウボラとの連携-フィンランドにおける切れ目のない支援からの考察-
3. 学会等名 日本保育学会第70回大会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

向井美穂・上垣内伸子・井上知香、十文字学園女子大学(研究代表:向井美穂)、親の主体性を育む子育て支援 「対話と傾聴」を基本とするネウボラナースからの示唆(研究成果報告書)、2020年3月、34頁

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	井上 知香  (INOUE CHIKA)  (80710540)	常葉大学短期大学部・保育科・講師    (43804)	

